

研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： インフルエンザ制圧を目指した次世代ワクチンと新規抗ウイルス薬の開発

2. 研究代表者：河岡 義裕（東京大学医科学研究所 教授）

3. 事後評価の概要

(1) 事後評価会の実施時期

平成 27 年 4 月 17 日（金）

(2) 評価者

(主査) 山西 弘一 阪大微生物病研究会 理事長

(委員) 川上 浩司 京都大学大学院医学研究科 教授

(委員) 石井 健 医薬基盤・健康・栄養研究所 創薬デザイン研究センター センター長/
大阪大学 WPI 免疫学フロンティア研究センター ワクチン学 教授

4. 事後評価結果

研究代表者が描いている究極的なゴールは、「ワクチン製造株の確立」「新規アジュバントの探索」「ユニバーサルワクチンの開発」と「宿主因子を標的とした抗ウイルス薬の開発」であるが、約 1 年間という本事業の研究期間を考慮すると、実質的な目標は、これらの研究開発を継続的に発展させること、および継続的発展のための人員・設備面での体制を整備、ということになるだろう。したがって評価の観点は、基礎研究から実用化を想定した応用研究へのシームレスな繋がりが行われていること、および実用化を想定した応用研究を実施するための人員・設備面での体制を整備すること、の二つになる。

前者について、研究代表者は前プロジェクトの ERATO でインフルエンザウイルスの基礎研究において世界でトップレベルの成果を上げたわけであるが、この成果を継続的に発展させ、インフルエンザウイルスによって変化する宿主遺伝子を群として同定した点、インフルエンザウイルスの増殖効率を上げる細胞株の樹立、高増殖能インフルエンザウイルスの取得など、創薬・ワクチン開発に向けて研究を進展させている点は評価できる。

後者について、基礎研究である ERATO の成果を、実用化を目的とした次のプロジェクトに繋げるためのマネジメント体制を構築するため、製薬企業で抗インフルエンザ薬の探索・開発経験がある人間をプログラム・マネージャーとして招聘され、創薬ターゲットの探索・開発を実施する人員および設備の両面において強力な体制が短期間で構築された。これは研究代表者のリーダーシップがいかに発揮された結果であり、高く評価できる。

本プロジェクトは、限られた研究期間の中で、リーダーシップに富んだ研究代表者を中心に、積極的にチャレンジングな課題に取り組み、ワクチン、抗ウイルス薬の開発に資する技術基盤を確立させた。体制整備も戦略的に行われており、本プロジェクトの成果を押し上げた効果が見られ、今後研究が進展すればイノベーションの創出が期待できる。

以上から、十分な成果が得られたと判断する。

以上